



(青龍観音)

日々好日

弘法大師



日々好日は信心から

日々好日

(令和六年一月発行)

過ぎし一年、世界はウクライナや中東ガザでの戦争は目を覆いたくなる惨状を呈し、我国は安逸を貪る平和な国状の中で、セクハラ、パワハラが各職域で蔓延しているかの如き印象をもたらし、政界も税理士の資格を持つ財務副大臣が就任直後に辞任に追い込まれたり、政治家金パーターの収入不記載や議員還流疑惑が明るみ出るなど、物価高に苦悩する国民を置き去りにした醜態が露見しています。

また学生八万人という日本大学の大塚にかかわる事犯処理では執行部間の確執が明るみに出ました。宝塚歌劇団員の自殺も話題になり、更に若者の闇バイトの詐欺事件では多くの高齢者が泣かされました。

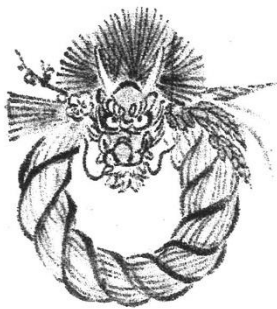
こうした枚挙に暇のない事犯に善良な国民大衆は善悪の価値観を誤りかねない事態に直面しています。

新年のはじめの月を正月といいますが、正月の正は一を止めるとも解されますが、人間のかかる愚かな悪しき一を止めて清新な国となることを、歳徳神に誓って新しい年の一歩を踏み出したい。

弘法大師のお言葉

「身と口と心とに十悪を行ず、不忠不孝にして罪悪繁し、因果を撥して罪福をないがしろにして、蕩逸混迷にして口腹を営む」 (性霊集巻第一)

(体と口と心とで様々な悪を行い罪を造る者はあとを断たない。因果の道理を無視して心が暗く迷い目先の欲望を追い求める)

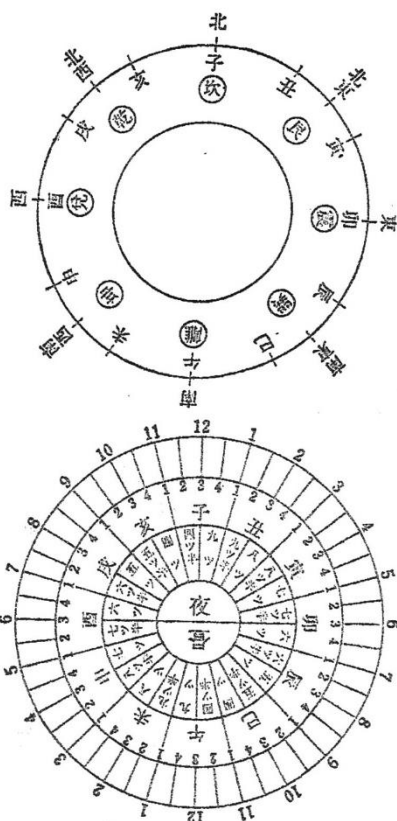


## 令和六年甲辰年の年頭に

令和六年は十干十二支でいえば甲辰（キノエタツ）年ということになります。この十干も十二支も草木の「発生」「繁茂」「成熟」「伏蔵」の四つの転機を基にしてその推移の状態を表現したもので、十干の甲は甲冑の甲で種子の未だ発芽しないで厚皮を被っている状態の時の表現。十二支の辰は振で、草木の形が整って、活力旺盛になつてきた状態の時の表現だという。

この干支の説明は「星と暦と真言密教」（岩原諦信著）よりのものですが、現在はこうした意義は無視され、干支を意識するのは還暦を迎えた時とか、年賀状を書くときなど新年を迎えた時でしょう。

そんなことで干支は年を表すものと思われませんが、それだけではなく時刻や方位も表していたのです。



つまり、天地間の凡ての生命は一年の内に十二支の階段をもって推移しているということですが、繁雑になりますので干支のことはこの当たりで終わりと致しましう。

そして、辰すなわち龍については辰年ごとにいろいろ書いてきていますので今回は割愛し、過去四度（昭和五十

一年・昭和六十三年・平成十二年・平成二十四年）の辰年の龍門寺に関わること、私自身のことなどを寺報を手掛かりにちよつと振り返ってみました。

先ず昭和五十一年の四月号（八十六号）より、今から思えば骨董品にちかい旧式の輪転機での印刷となりましたが、製版は前時代の機器でしたが、従前よりは読みやすい仕上がりとなりました。それまではよくぞこのようなものをとらうほどの見苦しい印刷でした。

これも内容はさて置いてのことでしたが、檀信徒の方々にはよくぞお付き合いをいただいたことだと恥じ入るばかりです。

翌五月号には、先月の寺報でちよつとふれました司馬遼太郎の「空海の風景」の読後感を書いています。それを梅原猛が痛烈に批判していることも記しています。

次の昭和六十三年の八月号には、それまでの木造の掲示板に代わってアルミの掲示板を檀信徒の有志に御奉納いただいています。それは現在も門標の脇に建て掲示伝道などに活用していることは申すまでもありません。

六月には万徳院に寺号の門標を建立しています。揮毫は小川一味斎。筆塚の石碑も建立して頂きました。

そしてその年の十一月には広島県千代田町の芸能伝承館で、万徳院展を開催していただいています。これは同所の万徳院跡が国の史跡に指定されたことを記念したもので、八祖大師、十二天、涅槃図などの仏画を中心としたものでしたが、わずか四日間に小さな町にも関わらず、一三〇〇人の拝観者がありました。

次の平成一二年には三月号で当山の三躰の大師像の由緒来歴を書いています。岩国初代領主吉川広家の姉が山陰の益田元祥に嫁いでいますが、像高五十センチのその



像底に左の文字が朱書きされています。

奉造立 高祖大師影

為自覺通心居士成三菩提

施主 益田氏 覺夢

妻

此の施主名で思い出されるのは、像高二尺五寸の万徳院の彩色の大師像である。

施主が益田覺夢その人なのです。この二つの大師像は大きさも御面相も全く異なるものの、万徳院と龍門寺は古くから深いかかわりがあることを知ります。四百年を経た像だということです。

高野山奥之院聖燈の背後に安座する大師像の底には左の墨書きがあります。

昭和九年六月十二日

願主 松井真道

仏師 安芸郡坂村

林 正市



この像は、弘法大師御入定千百年御遠忌に際して大師信仰を益々広めんとして松井氏が幾つもの大師像を造らしめたものの一つで、先代がそれを知って自ら出向いてお迎えした御像である。楠でかなりの重量である。像高四十四センチ、彩色されています。

今一つは庫裡の仏間に安置の像で木造ではなく塑像で胴内は空洞で底辺に緑色の布が張られ、それをはがすと中から左の文字が書かれた二枚の板が出てきました。

敬白 弘法大師

奉為 日本民族 岩国市民 御願円満 安穩太平 信心法主

子孫平安 悉地成就 師長父母 二親亡魂 助成合力

同共往成 乃至法界 平等利益



誓願集 曰

卜居高野之樹下 遊神都卒之雲上  
不闕日日之影向 檢知処々之遺跡

昭和三十三年九月二十日

至心開眼修復 仏子 俊澄 敬白

昭和三十三年初秋三日 壬力用漆

奉修復大師 九寸八分座像也

南都彫人 崎間開宇



この大師像は先代が高野山修行を終えて下山の際、然る高僧からしつかり拝むようにと託されたものである。尚、当山には先年の「弘法大師」諡号下賜一一〇〇年の際お迎えした大師像があります。

御誕生千二百五十年は過ぎましたが、弘法大師との同行二人の信仰生活をなす私たちとって境内の修行大師像とともにまことに心強い四躰の大師像である。

この年、万徳院に永代納骨堂を建立しています。また、四月には岩国市選挙管理委員の五期目の当選をしています。この時期岩国市政に多少なりとも貢献したということになるでしょうか。

平成二十四年には七月三十日に此処通津に移転のために土地を購入取得し、その年の十二月二十一日に土地登記を完了しています。それは晋住三十年の歳末のことでした。この年の四月には高野山真言宗山口支所長に就いています。

過去四度の辰年を極く簡単に振り返ってみました、それにはなんの意味があるものではありませんが、私のような凡庸な人間でも年々何事かを為してきたことがわかります。これは残された日々を生き抜く支えという力のようなものを感じることが出来ます。

その中でも先にも触れましたが、この寺報の月々の発行こそが僧侶として最低限の能力を振り絞って生き抜くエネルギーとなっていて、今更ながら感じるのです。だから、幾度となく印刷機を買い替えても発行を続けてきたのですが、印刷機の性能がよくなればなるほど高額となるのですが、家内も理解を示し協力をしてくれているのだと受け止めています。

こうして今日、パソコンやプリンター、そしてリングラフなる印刷機などの機器が健在であるだけに、私は彼の機器と毎月とつ組み合いの勝負をしているようなところがありません。

檀信徒教化などという仰々しい課題は既に葬り去っています。安らぎと大きな存在に抱かれているという安心感とでもいうような信心の慶びのようなものを、月々述べていただくと出来ればと思っています。

千代田町での万徳院展の際、仏画の状態が良くないことを認識させられ、それ以来万徳院も龍門寺にも数多くの軸物などがあり、それらを順次修復してまいりました。言うまでもなく檀信徒の協力あつてのことです。

それは仏画に限らず仏像なども折々の記念事業として修復を重ねてまいりました。これは先代が昭和十六年の罹災で大きく損傷した本尊彌勒菩薩の修復や、高野山よりの大師像の修復をなしてきたことの踏襲でもあります。

古きものを維持管理するのはお金もかかり大変ですが、それらのほとんどを為し終えることが出来たことを喜びたい。どれもこれも檀信徒の理解と協力があつてのこと、改めて有難いことだと固い老躯を二重にも八重にも折って感謝御礼をさせていただく毎日です。

個人としては選挙管理委員を五期二十年つとめました。それとほぼ同時期に保護司も二十年間つとめています。更生保護活動にも意を注いでまいりましたが、いずれも私の能力実力以上のものを期待されたようにも思いますが、得難い経験をさせて頂いたのだと受け止めています。山口支所長にしても支所内諸師の御指導協力あつてのことで二期六年もその任にありました。

これらは、十六才の愚鈍の少年を大師御母堂創建という寺院の執事に据えられた草繫全弘師僧の重用にはじまるもので、そのどれも満足とはいかないまでも誠心誠意務めさせて頂きました。

私はこうして一人の人間として、また僧侶としても成長させていただいたのだと思っています。

また、此処通津に寺地を得たのが辰年であつたということも寺名のかかわる不思議さを感じています。それによつて宗教法人設立がなり一般寺院の仲間入りができて、檀信徒の方々にも安心感を持つて頂いたことでした。それを思えば前回の辰年は龍門寺にとつては歴史に残る年であつたといえるでしょう。

しかし、それで総て良しとはまいりません。今に続くコロナ感染があつたとは言え参詣者減は顕著です。それは寺の移転による影響もあるでしょうが、一番の原因は加速する高齢社会が要因の一つであることは疑いをいれません。

統一教会やエホバの会などの問題で、宗教二世とか三世という言葉が聞かれますが、佛教界でも熱烈な信仰をもつておられた世代が亡くなられ、信仰世代の交代の過程にある





ということですが、それは決めつければ社会的な信仰離れが参詣者減の源であるということになります。

こうした時勢のなかで寺院の活性化を図るには何をすればよいのか戸惑いを禁じ得ませんが、先日も総務省よりの法人の実体調査があり調査票を返送しましたが、後日電話があり、事業内容を問われました。お寺ですから月間行事、年間行事、葬儀などと、返答したことでした。

こうしたこと以外に活性化のために新たに為すことは思いつきません。たとい何事かを思いついたとしても住職の資質や、寺のおかれた現状を思えば実施は不可能だということですが。

つまるところこれまで通り地道な教化活動しかないということになります。それではじり貧となりますが、それでもこれまでの教化の成果がじり貧の傾向を弱めてくれるであろうことを信じてたい。寺報にこんな弱音を書き綴っている場合ではないということですが。

年頭に今年何を為したいのか宣言することもできないのは無様なことですが、いままでもこうしたことの連続でしたから然程心配はしていません。

「龍車に向かう蠟燭の斧」（かまきりのような弱いものが、身のほどかまわず無鉄砲に強いものにたちむかうこと）

辰年だからと言って大きな目標をかかげることはもう叶いません。

「龍頭蛇尾」に、終わることの多さを思えば目標なしで一步を踏み出すのも故無しのことではありません。

「龍の鬚を撫で虎の尾を踏む」ような危険を冒すことなどもう出来ないということです。

「龍行虎歩」の威儀莊重な様子を頭に描きながら様々な仏事をつとめさせていたのですが、足元不如意のお見苦しさはご容赦ください。

学徳ともにすぐれた僧侶を「龍象」といいますが、私には無縁の語句ですが、幾多の龍象のご指導のもと今日の私があるのだとおもえば龍象という言葉も無縁ではありません。

「龍を烹、鳳を炮る」とは、珍しい御馳走のこと。

「龍駒鳳雛」と言えば幼少で賢才なること。

「龍が吟ずれば雲が出、虎が嘯けば風が生ず」とも言われています。

また、仏像を入れる立派な厨子を「龍龕」といいますが、お大師様の唐よりの請来品の中に白檀の佛龕がありますが、これが正しく龍龕でありましょう。

高野山より何かの記念にその仏龕の額入りの写真を頂戴しています。

昭和五十九年、旧唐都長安の青龍寺趾に惠果空海記念堂が建立されましたが、その年記念堂を参拝しましたが、その参拝記念に購入したもののの中に、この請来品に酷似した佛龕があります。

先日、二十人ばかりの中国人の来山があり観てもらおう物とてありませんので記念堂参拝の土産品数点を展示したことでしたが、この仏龕は小さなものですが写真では見分けがつかないほど諸仏の配置が似ており彫りも緻密なので大事にしななければならないと胆に



2023/11/20 11:13

銘じたことでした。前頁の写真がそれである。

「龍門の三級」これは寺名の由来ともなっています。

中国山西省、黄河の上流瀑布をなす。これを龍門の滝という。瀑水は三段に分かれ険にして船を通ぜず。これを龍門の三級という。

黄海の大魚数千、その下に集まるも上ることを得ず。上れば龍になるといふ。試験に及第して進士となる喩。

最後に大師様のお言葉より龍を喩とする教え戒めをあげてみました。

「賢智は優華の如く蠢癡は鄧幹のごとし。このゆえに善を仰ぐの類はなお麟角よりも稀なり。悪に耽るの流はすでに龍鱗よりも鱗なり」

(三教指帰卷上)

(賢い者は三千年に一度咲くという優曇華のように極めて稀で、愚かな者は鄧の林のように数多い。

だから、善いことを為すものは麒麟の一本の角のように数少なく、反対に悪に耽る人々は龍の鱗のように多い)

矩をこえることのない齢をはるかに超えて、八十路をトボトボと歩む身であれば悪に耽るようなことはありませんが、微善すらもなし難いことですが、生あるかぎりは苦を抜き樂を与える慈悲のころは失うことなく持ち続けたい。

慈悲のころを失わなければ、老いても感謝の念をもつて生き抜くことができます。そのためにも心身の健康を心掛けたい。

身体の病は心の病でもあります。人生百年の時代といわれて久しいことですが、寿命も人それぞれであり人と比べて我が身を憂いてはなりません。憂いは更なる憂いをもたらします。

反対に樂觀主義者ではありませんが、大きな眼をひら

いて世間を見れば、自分より重い病気であったり、不遇を感じておられる人は数多いのではないのでしょうか。この程度の不運不幸であつて良かったとさえ思うようにもなれば、人生は一変しそれを喜べるようになります。それはやがて自分の人生も捨てたものではないと思えるようになり、一日一日が充実したものになってきます。これは八十余年を生きてきた私の人生観でもあります。過ぎし歲月の様々なことどもを思い起こせば、不運不遇すらも有難い縁だと受け止めることができます。人生は禍福糾える繩の如しであることが実感できます。新しい年もそうした年でありましょう。清新な気持ちで辰年の一步を踏み出しましょう。



御案内

一月十八日午前九時半より

※ 初観音法要・千手観音息災護摩祈禱  
大般若經転読祈願

二月三日午後二時より

※ 節分星祭厄除け祈禱

(申し込み受付中)

## あとがき

冬の殺風景な境内で家内が植えた数株の葉ボタンが歳末であることを教えてくれています。また、屋内では檀家さんから頂戴したシユクラメンの二鉢が存在感を示し、ここを温めてくれています。

十一月二十九日、岩国基地を飛びたち沖縄に向かっていた米軍のオスプレイが屋久島沖で墜落し、米兵八名が亡くなられるという事故がありました。

オスプレイは二機で低空を飛行しているのを度々目にしておりましたが、事故も多く墜落の不安を常に感じていました。その不安が現実のものとなりました。

我が国を護ってくれている米軍機の事故ですが、世界に目を転じれば様々なおもいが胸を去来します。世界平和の一念でここを一つにすることはできないのでしょうか。

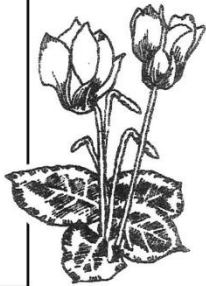
そんな中で今年も檀信徒の方々の善なる信仰心に支えられてお寺の護持がなったことを、年の終わりに感謝しないではおられません。有難うございました。

(今月は都合により佛教説話は休みます。)

世界病む

処方箋もなく

年送る



これは昭和四十四年三月から毎月発行している寺報の最新号です。ホームページを開設したものの住職は高齢で、確たる活動もしていませんので、その更新が出来ないでいました。しばらくの間この寺報の転載をもって更新にかえたいと思います。

発行者 高野山真言宗 宝池山 龍門寺

吉岡 光昭